

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：14503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730691

研究課題名(和文) 3歳未満児の身体活動を規定する要因の探索と運動発達との関連性に関する調査研究

研究課題名(英文) A study of the factors related to the motor development of less than 3 years old

研究代表者

大和 晴行(YAMATO, HARUYUKI)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：70522382

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、3歳未満児からの運動発達の向上のための方策について検討することを目的とし、3歳未満児の運動発達に関連する要因について検討を行った。その結果、(1)親の遊びに対する養育態度が子どもの活動意欲と関連していること、(2)活発な身体活動を伴う遊びの多さが、姿勢制御や移動運動、微細運動の発達と関連していることが示された。結果を踏まえ、保育環境及び子育て支援における親子活動のあり方について述べた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the measures for the improvement of the motor development less than 3 years old, was examined factors related to motor development of less than 3 years old.

As a result, (1) Parent's Attitude for Child Rearing in Active Play is associated with children's activity, (2) large number of active play, was associated with the development of attitude control and locomotion and fine motor. From the results, we have described the way of childcare environment and parent-child worksyops.

研究分野：保育学

キーワード：3歳未満 運動発達 養育態度 遊び

1. 研究開始当初の背景

現在、幼児期から全身を使う粗大な運動発達、及び手指を使うといった微細な運動発達の両面において発達の遅延化や技能水準の低下がみられる。そうした中、平成 19 年には、子どもを取り巻く生活環境の質を向上させる必要があるとして、日本学術会議子どもを元気にする環境づくり戦略・政策検討委員会から「我が国の子どもを元気にする環境づくりのための国家的戦略の確立に向けて」が提言された。これは、乳幼児期から身体活動機会を増大させ、基本的な運動発達の向上を目指すことが重要な課題であることを示している。

そうした中、先行研究においては 3 歳時点における体力上位群と下位群の差が最も大きいこと、さらにそうした 3 歳時の体力差が 5 歳時の体力差に影響を残していることが明らかにされており、3 歳までの“家庭での過ごし方”がその後の体力特性を決定する要因の 1 つであると指摘されている(春日, 2008)。こうした指摘は 3 歳時点までの“家庭での過ごし方”すなわち生活習慣の状況や遊び状況などの生活の状況が運動発達とどのように関連しているか詳細に検討することが、良好な運動発達を支援するための具体的方策を考える上で、今後重要な課題になることを示している。

加えて、乳幼児期の運動発達を考える際、生物学的要因は変更不可能なこと、物理的環境要因の充実には多大な時間、費用、労力を費やす必要があり、子どもの身体活動といった日常行動の変容には養育者のサポートといった社会文化的要因に着目することが効果的な方策を考えていく上で重要であることが指摘されている(上地, 2003)。

しかし、これまで 3 歳未満児を対象に、運動発達と生活習慣、遊び状況などの生活状況や親の遊びに対する養育態度との関連性を検討した研究はなく、今後の乳幼児期からの運動発達の向上を目指す方策を考えていく上では、3 歳未満児の運動発達とその影響要因について詳細な検討を行うことは必要不可欠な課題であると考えられる。

2. 研究の目的

研究の背景より、本研究では、3 歳未満児における親の遊びに対する養育態度尺度の開発を行うと共に、3 歳未満児における運動発達の状況を把握するため、保育現場で保育士が実感している 3 歳未満児の粗大・微細運動の課題を整理し、保育士評定による「3 歳未満児における子どもの気になる動き」と親の遊びに対する養育態度、生活習慣や遊び状況といった生活状況との関連性について明らかにしていく。以上を通して、3 歳未満児からの基本的な運動発達の向上を目指すための、生活の在り方や具体的な子どもへのかかわり方等の方策について検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 親の遊びに対する養育態度尺度の作成
子どもの遊びに対する親の遊び養育態度尺度を開発するため、2013 年月から 4 月に保育士 195 名を対象とした事前調査を実施し、尺度開発に使用する質問項目の選出を行った上で、2013 年 8 月から 9 月にかけて、本調査として保育園児の保護者に質問紙調査を実施し、490 名から回答を得た。

(2) 3 歳未満児における気になる動き評価
2013 年 4 月、保育士 88 名を対象に「最近、保育中に気になる子どもの動きのおかしさ」について具体的な内容を自由記述式で回答を求めた。その際、その気になる動きが見られるおおよその年齢についても尋ねた。回答の類似性を考慮し整理した結果、0 歳から 6 歳までの全年齢を通して 63 項目の気になる動きが抽出された。さらに動きの要素に着目して分類した結果、「姿勢制御系の気になる動き」、「移動系の気になる動き」、「操作系の気になる動き」、「消極性・落ち着きのなさ」に分類された。各項目の記述数や加齢推移を参考に、最終的には 3 歳未満児の気になる動きとして 0 歳 15 項目、1 歳 19 項目、2 歳 20 項目が抽出された。

(3) 3 歳未満児の気になる動きと親の遊びに対する養育態度及び生活状況との関連性

2013 年 8 月下旬から 9 月上旬にかけて調査を実施した。対象は保育園 5 園に通う 1 歳児(12 ヶ月～23 ヶ月) 91 名、2 歳児(24 ヶ月～35 ヶ月) 160 名の計 251 名とその保護者、及び主担任、副担任を務める保育士であった。なお、本研究は、調査園の園長から調査の同意を得た後、全ての乳幼児の保護者に対し、調査の趣旨や内容について文書にて説明を行い、書面による同意を得た上で実施した。

気になる動きについては担任及び副担任の保育士による協議のもと、「当てはまる」から「当てはまらない」の 5 段階で評定してもらった。

また、親の遊びに対する養育態度及び生活状況については保護者を対象に質問紙調査を行った。生活状況については、生活習慣として「就床時刻」、「睡眠時間」、「排便日数」、「登園前のテレビ・DVD 視聴時間」、「降園後のテレビ・DVD 視聴時間」、について尋ねた。また、遊び状況として、「平日及び休日の外遊び時間」、「遊び人数(自身の子は数に含めない)」、「遊び経験」については 17 項目の遊びの経験について 5 段階で評定してもらった。

4. 研究成果

(1) 親の遊びに対する養育態度尺度の作成
事前調査の結果から選出した 18 項目について主因子法、Promax 回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から 2 因子解を採用し、12 項目が抽出された。第 1 因子は 7 項目で構成され、「子ども

と遊んでいるとき、声に抑揚などつけ、大げさに振る舞う」、「ダンスや身振り手振りのある遊びをするときは大きく動いたり踊るようにしている」など、親自身が遊びに積極的に参加し、子どもと遊びを共有しようとしている姿勢がどの程度、親の豊かな身体表現に表れているかを示す項目群と考えられたため、第 1 因子は「遊びへの積極的関与と共有」因子と命名した。第 2 因子は5項目で構成され、「子どもがしていることは危なく感じても少し手を添えるなどして一緒にする」、「子どもがやったことがない遊具や遊びがあれば、誘って一緒にしてみる」など、子どもの意志を尊重し、遊び経験を保障したり、遊び経験を広げたり深めたりしようとする姿勢がどの程度親の言動に表れているかを示す項目群と考えられたため、第 3 因子は「遊びの保障と発展的関与」因子と命名した。

本尺度の信頼性の検討を行った。係数を用いて下位尺度の内的整合性を検討したところ、「遊びへの積極的関与と共有」は.85、「遊びの保障と発展的関与」は.73であった。加えて、親の遊びに対する養育態度尺度の併存的妥当性の検討を行うため、既存の養育態度尺度との関連性を検討した結果、本尺度の併存的妥当性が認められた。

また、親の遊びに対する養育態度が子どもの遊ぶ意欲に及ぼす影響について検討するため、子どもアクティビティ尺度（鈴木，2005）との関連性を検討した。その結果、親の遊びに対する養育態度尺度の両下位尺度共に、有意な正の相関が認められた。親の子どもへの遊びに対する態度が子どもの活動性の高さとして1歳児から関連している状況が確認された。

(2) 3歳未満児における気になる動き

2013年8月から9月にかけて、保育園に通う0歳児から5歳児クラスの子どもの569名について、気になる動きの評価を担当及び副担任に依頼した。

「あてはまる」と「ややあてはまる」を合算した割合を算出した結果、「姿勢制御系の気になる動き」では、「転んだときに手を出すことができない」が0歳児で28.0%が該当し、2歳児でも11.0%にみられるが、その後減少し、5歳児では該当割合は1.8%まで減少した。

また、「イスに座る姿勢がよくなく、すぐに背中が丸くなったりして姿勢が崩れる」といった姿勢保持に関するおかしさが0歳児で10.0%が該当し、その後、加齢と共に増加し4歳児では36.5%、5歳児で27.7%が該当することが示された。また、「床に座ったりするとすぐ寝転がったり、寝転がって遊んでいたりする」は0歳児で38.0%と多く、5歳児でも12.4%が該当することが示された。

「移動系の気になる動き」では、「腕のふりや足の動かし方がおかしかったり、ぎこちない走り方をする」が1歳児から4歳児では

1割弱の該当であるが、5歳児では16.8%が該当し、増加することが確認された。

「操作系の気になる動き」では、主に微細運動に関するものが多く「箸やスプーンの持ち方がおかしかったり、上手く使えない」が1歳児で28.4%が該当し、加齢に伴い若干減少するものの、5歳児でも18.6%が該当することが示された。

「消極性・落ち着きのなさ」では、「落ち着いたり集中することができず、じっとしてられない」が0歳児から5歳児のすべての年齢で該当が2割を超えることが示された。

子どもの動きのおかしさは年齢により多様な実態が確認されたが、0歳児から継続的に実感されている課題としては姿勢保持、手指の不器用さ、自己制御に関連する課題が確認された。

(3) 3歳未満児の気になる動きと親の遊びに対する養育態度及び生活状況との関連性

気になる動きと親の遊びに対する養育態度との関連性について検討した結果、1歳児においては両下位尺度得点と「移動系の気になる動き」及び「消極性・落ち着きのなさ」との間に相関が認められ、親が積極的な遊び姿勢を示す子どもほど、移動運動のぎこちなさが少なく、活動意欲が高い傾向にあると推察された。また、2歳児においては、「消極性・落ち着きのなさ」との間に相関が認められた。以上の結果から、1歳児時点から親の遊びに対する養育態度は、一部、子どもの気になる動きとの関連性が認められるものの、本調査においては継続的に子どもの消極性や落ち着きのなさといった心情的な側面と関連するものと考えられた。

次に気になる動きと生活状況との関連性について、生活習慣との関連性は本調査においては2歳児において就床時刻の遅さが「消極性・落ち着きのなさ」と関連することが示されたが、それ以外の関連性は認められなかった。一方、遊び状況との関連性については多数の項目で気になる動きとの関連性が認められた。Partenの遊びの分類との関連性を検討した結果、1歳児において「なにもしない」行動の多さと、「消極性・落ち着きのなさ」「姿勢保持の気になる動き」との関連性が示された。また、2歳児においては、「なにもしない」行動の多さ、及び「傍観的行動」の多さと、消極性・落ち着きのなさ」「姿勢保持の気になる動き」との関連性が示された。

推察の域は出ないが、こうした結果から何もしていない、傍観的な状況が続くことで、様々な姿勢制御を行いながら身体各部を動かす経験の減少や、身体活動の低さなどが子どもの気になる動きと関連する事が考えられた。

次に子どもの遊び内容との関連性については、1歳児においてはバランスを必要とする場所での歩行や遊び、遊具等での遊びや、よじ登ったりぶら下がったりする動きのあ

る「活発な身体活動を伴う遊び」の少なさと、「姿勢保持の気になる動き」、「移動系の気になる動き」、「操作系の気になる動き」と関連性が認められると共に、親子でじゃれあって遊ぶことや、親子体操のような身体活動を伴う遊びなどの「親子あそび」の少なさと「移動系の動きのおかしさ」、「操作系の動きのおかしさ」との間に関連性が認められた。

次に2歳児においても、「活発な身体活動を伴う遊び」の少なさと、「姿勢保持の気になる動き」、「移動系の気になる動き」、「操作系の気になる動き」との関連性が認められると共に、お絵かきやぬり絵などの「手指の使用を伴う遊び」の少なさと、「操作系の気になる動き」との間に関連性が認められた。

こうした遊び内容との関連性から、活発な身体活動を伴う遊びが1歳児～2歳児にかけては姿勢制御や移動系の動作のみならず、微細運動の発達にもよい影響を及ぼす可能性が示唆された。

以上、本研究の結果から、今後の3歳未満児からの基本的な運動発達の向上を目指すための、生活の在り方や具体的な子どもへのかかわり方等の方策について以下の事項が考えられる。

第一に、本研究において、保育現場では0歳児の頃からすでに運動面において「気になる動き」が散見されており、とりわけ姿勢保持に関する課題、微細運動に関する課題、意欲や落ち着きのなさといった心理的側面の課題を有していることが確認された。そうした中、特に「活発な身体活動を伴う遊び」が多く気なる動きと関連性が認められたことを考えると、保育所等では3歳未満児における保育環境として、一人一人が十分に身体活動を行う環境構成の工夫や、保育室などの日常生活空間の中でも様々な動きが出現するよう意図した保育環境の構築を考えていくことで、よりよい運動発達の育ちに寄与することが考えられる。

第二に、親の遊びに対する養育態度といった「親が子どもとどのように遊ぶか」は、本研究においては直接的な運動発達へ寄与するわけではないものの、1歳児から2歳児にかけて継続して子どもの意欲や落ち着きと関連していた。こうした子ども自身の意欲の高まりが、子どもの主体的な身体活動につながっていくことは十分考えられ、今後のよりよい運動発達を考えた時、親の遊びに対する態度は非常に重要な位置づけになるものと考えられる。現在、保育所や子育て支援を行う場の取り組みとして、親子ふれあい活動（親子体操）を行うところも多いが、親子でできる遊びを紹介するような取り組みに合わせて、遊びの中での具体的な親の態度の大切さに気付いていけるような活動が必要だと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

大和晴行, 活動的な遊びにおける親の遊び態度と子どもの遊び状況との関連性, 幼少児健康教育研究(査読有り), 第20巻第1号, 2014年

〔学会発表〕(計 2 件)

(1) 大和晴行, 保育者が実感している0歳から6歳の子ども動きのおかしさに関する調査研究, 日本保育学会第67回大会, 2014年5月18日, 大阪総合保育大学(大阪)

(2) 大和晴行, 乳幼児期における動きの課題, 子育て支援センター全国セミナー2014, 8月29日, ANAクラウンプラザホテル熊本ニュースカイ(熊本)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大和 晴行 (Yamato Haruyuki)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号: 70522382